

NEJIREBANE, No. 104, 30. Apr. 2003

## 加藤敏行氏蒐集の北海道産コメツキムシ

岸井 尚

〒569-1044 高槻市上土室 1-0, 6-410

北見市の加藤敏行さんには、この10年ほどの間に実に多くのコメツキ資料を調査する機会を頂き、その結果は前報(2002, 99: 10-15)にも述べたように、北海道道東地域のコメツキ・ファウナの解明に貴重な貢献をされてきたが、更にその後蒐集された資料を2002年9月にお送りいただいた。今回はその同定結果と筆者の所見を述べることにする。加藤さんと共にその資料収集に協力された川原進さん並びに上手雄貴さんには深く謝意を表したい。なお、前報で新種と見なし近く記載予定とした2種のカネコメツキは共に昆虫学評論(2002, Vol. 57, No. 2: 129-138)に下記の種名で記載されたが、共に今回もそれぞれ1頭の資料が含まれていた。

*Limoniscus katoi* KISHII, エゾカネコメツキ (前報の *Limoniscus* sp. 1)

*Limoniscus kawaharai* KISHII, キタカネコメツキ (前報の *Limoniscus* sp. 2)

*Hypnoidus rivularius ainu* ÔHIRA et YASUDA, 1994 アイヌチビヒサゴコメツキ (写真1)

斜里町富士林道, 1♀, 17. V. 1998, 川原進 leg.; 標津町根北峠側, 1♀, 28. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

邦産の種はLEWIS (1894: 184-185) 自らが青森県の岩木山(津軽富士)頂上部で採集(2 exs., 1. IX. 1880, alt. 4921 feet)し、独立種(*Cryptohypnus rivalis*)として命名したものである。記載文でも触れているが本種はユーラシア大陸北部から北アメリカ大陸北部に広く分布する *H. rivularius* に極めてよく似た種で、STIBICK (1978: 368) はそのシノニムとした。筆者(1993: 8)も外部構造の相同性からこの両者が同種と見なすべきと考えたが、下翅の縮小退化性が *rivalis* で顕著であること、雄交尾器の中片並びに側片先端部の形状の微妙な差異が認められることで、本

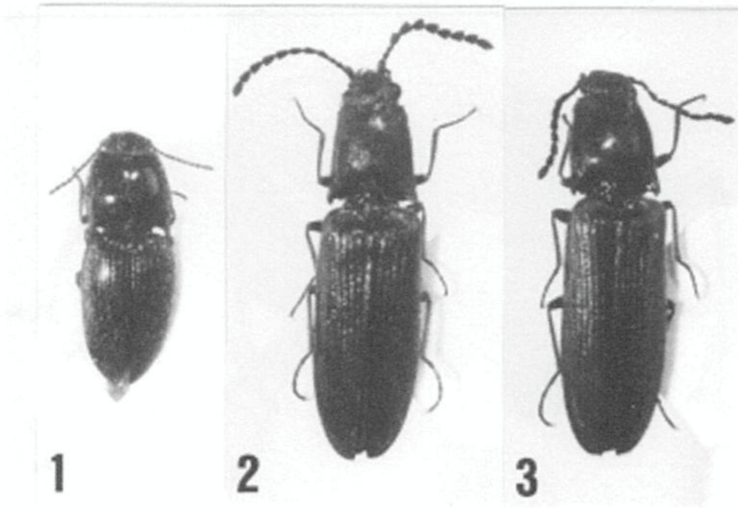


写真1-3. 1, アイヌチビヒサゴメツキ(♀, 4.7 mm); 2, エゾカネコメツキ(♂, 8.2 mm); 3, キタカネコメツキ(♀, 7.7 mm).

邦産の個体群は *rivularius* の別亜種と見なすのが妥当と考える。また北海道本土及び利尻島産の個体群は上記のように本州産 (*rivalis*) 及び礼文島産 (*rebunensis*) とは別亜種とされているが、筆者の検した北海道本土内の若干の山地から得られたものには、雄生殖器構造で異なる特徴を持つものもあり、本種のように隔離傾向の強い高地帯に生息し、且つ下翅縮小退化性のものでは、本州で多くの亜種分化が知られる同様の形態と生態をもつ、*Homotechnes motschulskyi* ミヤマヒサゴメツキ亜種群と似た形態分化圧の傾向を受けやすいと思われるが、北海道東端などでは低地でも生息するので更に広い地域での調査が必要であろう。

*Ligmargus aeneoniger aeneoniger* (MIWA, 1928) エゾヒサゴメツキ

北見市緑ヶ丘, 2 ♂♂, 15. V. 2001, 加藤敏行 leg.; 標津町根北峠側溝, 1 ♂, 28. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

北海道・奥尻島・国後島・本州北部に分布し本邦固有種であるが、前回の報告 (No. 99: 10) でも述べたように、本州産個体群は少なくとも雄交尾器形状で明瞭な違いが認められ、異なる亜種とすべきもので、これについては別に述べたい。

*Limoniscus katoi* KISHII, 2002 エゾカネコメツキ (写真2)

常呂町日吉, 1 ♂, 17. VI. 1997, 加藤敏行 leg.

前回の本誌の報告 (No. 99: 11) で *Limoniscus* sp. 1 とした種で、上翅肩部が茶褐色の種としては、現在山梨県鳳凰山周辺のみ分布する *L. hosodai* ホソダカネコメツキに極めて近似の種であるが、より小型であることと肩部の茶褐色斑が不明瞭、前胸背板後角の隆起線が弱く不明瞭、体毛は淡白黄色、雄生殖器側片先端基部の別れが小さいことなどで区別できる。

*Limoniscus kawaharai* KISHII, 2002 キタカネコメツキ (写真3)

小清水町美和, 1 ♀, 12. VI. 2000, 川原進 leg.

前種と同じ報告で *Limoniscus* sp. 2 として記録した種である。雄1頭で記載し今回雌個体を検し得たが、*L. imitans* タテジマカネコメツキ及び *L. vittatus* タテスジカネコメツキによく似ており、従来北海道から記録されていたこれらの種は本種を指すものと思われる。雌の外観もこれらの種、特に *imitans* によく似ているが、体表の真鍮色光沢は殆ど認められず、両性共に触角節は太短かく、前胸背板の点刻はより疎、上翅間室点刻はより密で粗大、雄生殖器の中片・側片共に明らかに幅が広い。

*Scutellathous porrecticollis* (LEWIS, 1894) ムナグロツヤコメツキ (写真6)

小清水町浜小清水防風林, 1 ♂, 26. VII. 2002, 加藤敏行 leg.; 小清水町大栄, 1 ♂, 13. VIII.

2002, 加藤敏行 leg.

本邦産の *Scutellathous* 属は既に8種知られているが、北海道からLEWIS (1894: 200–201) によって2種、札幌を基産地とする *S. comes* チャイロツヤコメツキ (3雄) と蓴菜沼を基産地とする本種 (8頭, 両性を含む) が記載されたのが最初で、彼は本州以南からは本属と思われる種は報告していないが、体形体色等のよく似たフトツヤハダコメツキ *Megathous suturalis* (属名の変遷: *Athous*→*Harminathous*→*Megathous*) を Kobe, Fukushima, Fukui から記録した(1894: 200–201). CANDÉZE (1873: 23–24) はその神戸の標本を Hiogo 産として本種を記載したものである。また福島産の標本は MIWA (1934: 111, Pl. V, f. 7) が LEWIS 標本として(Fuku-shima, 26–VII, 1881, G. LEWIS) 記録しており、これらの詳細については鈴木 (1987: 3–4) に詳しく、これらの資料が本属 *Scutellathous* のものではないことは確かであろう。それで本州産の本属の中で最も普遍的に見られる体全体が黄赤褐色のものが、LEWIS の *comes* に最も近い形態を持つものとして従来この名称で報告されていた。しかしMIWA (1934: 109, 111) の検索と資料データによると、彼が検した北海道産のこの2種は共にLEWIS 標本で同じデータで記録されている (Junsai 13–VII, 1880, G. LEWIS). 検索ではこの2種の違いは前胸背板と体長に関する “*fuscous or blackish, 9–10 mm: porrecticollis: castaneous, 12 mm: comes*” のみである。これまで筆者は前者と同定できる資料を比較的多数 (10♂♂, 1♀) 検し得たが、何れも原記載内容によく一致するもののみであった。しかし本州産で従来 *comes* と見なされていた資料と同じものを北海道からの資料では確認できなかった。本誌の前報 (No. 99: 11, Figs. 5 & 6) で小清水町美和産 (1♀, 22. VII. 2000, 川原進 leg.) として記録した資料は、前胸背板の色彩が薄く赤褐色なので *comes* と見なしたが、これは全くの誤同定で *porrecticollis* の初めてみる雌個体であったので不明を詫びると共にここで訂正したい。またその際、雌貯精囊内の5個の角質刺状板の形状が本州産 *comes* のものと一致すると述べたが、写真の上部にある大型の2個の角質板はほぼ同形同大で、これまでに検した本州以南産のものでは全ての種で形と大きさ共にわずかに異なる (KISHII, 2001: 213, Figs. 18–21). 北海道産の *comes* については大平 (1992: 36; 1995: 75; 1996: 67–68) が再三報じていて、その分布は確実であるが札幌以南の地域に限られているようで、本州産のものとは形態に若干の差があると述べている。その示した雄生殖器側片先端 (1996: 71, Fig. 2, F) の状態は内方で先端が突出気味で、殆どの個体で丸まっている本州産の個体とは異なり、彼が述べているように別亜種と見なすのが妥当かも知れない。これについては別に述べたい。

*Yukara inornata* (LEWIS 1894) キバネツヤハダコメツキ

標茶町多和平, 1♂, 29. VII. 2002, 加藤敏行 leg.; 小清水町大栄, 4♂♂, 2♀♀, 13. VIII. 2002, 加藤敏行 leg.

北海道, 付属諸島, 樺太から知られ、夏季に訪花性の強いコメツキである。

*Acteniceromorphus selectus* (CANDÉZE, 1865) エゾフトヒラタコメツキ

小清水町藻琴山登山道 (東藻琴町・美幌町・小清水町の境界), 1♀, 19. VII. 1995, 川原進leg.; 常呂町 日吉, 1♂, 17. VI. 1997, 加藤敏行 leg.; 小清水町美和, 2♂♂, 29. VI. 2000, 川原進leg.

北海道固有の種と見られるが、金源澤 (1984: 206) が済州島から *Actenicerus* 属として記録 (25. VII. 1977) し、更に李英仁他 (1985: 407) が再録した。又、Kon-Kuk Univ. Press (1994: 159) は *Liotrichus* (*Acteniceromorphus*) の種として済州島からのこの記録を載せているが、この所属変更はGURJEVA (1989: 45–46) に従ったものであろう。最近筆者は済州島産の多数の資料を検する機会を持ち得たが (KISHII et PAIK, 2002: 1–27), 本種は見あたらず、よく似た種としては *Actenicerus infirmus* の多数個体 (12 exs.) を検し、この中には小型で上翅の霜降状の毛斑を全く欠如する個体が複数個体あり、この様な標本を誤認した可能性があるものと考えている。

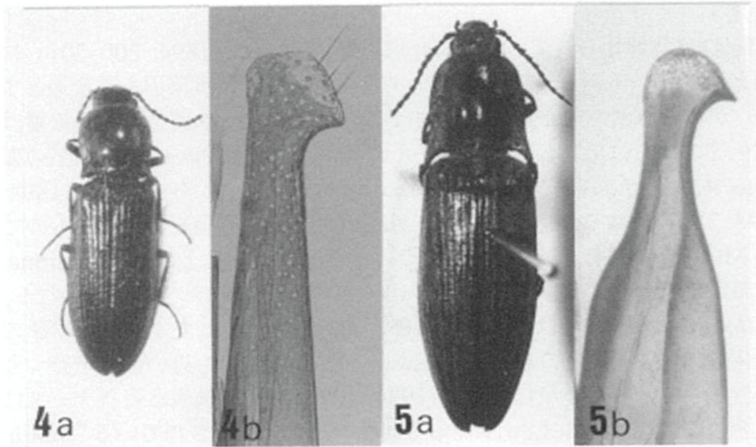


写真4 & 5. 4, エゾクロツヤヒラタコメツキ(a, ♂, 7.7 mm; b, 雄交尾器側片先端, 8348); 5, チシマシモフリコメツキ(a, ♂, 19.5 mm; b, 雄交尾器側片先端, 8334).

*Corymbitodes gratus* (LEWIS, 1894) ドウガネヒラタコメツキ

小清水町美和, 1♂, 12. VI. 2000, 川原進 leg.; 斜里町真鯉 (金山橋), 1♂, 1♀, 24. VI. 2000, 加藤敏行 leg.; 海別岳自然休養林, 2♂♂, 29. VI. 2000, 川原進 leg.

北海道からの本属の種は *C. concolor* ホソヒラタコメツキと本種の2種知られているが, 筆者は確実な前者を北海道からは検していない. 本種は樺太からの記録例もあるが, 本邦全土で普遍的にみられ訪花性の強い種である.

*Calambus kusuii* ÔHIRA, 1994 エゾクロツヤヒラタコメツキ (写真4)

標津町根北峠側溝, 1♂, 28. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

本種は稚内市で採集された1♂で記載されたもので (VII. 1974, Y. KUSUI leg.), 以後再報の無い珍しい種である. 本属の種はユーラシア大陸北部に広く分布するが既知種は少なく, ヨーロッパからアルタイに広く分布する属基本種の *C. bipustulatus* 以外では, シベリア, 沿海州及び樺太に分布する2種と本邦の本種を含む3種がその全てである. 今回検した上記の資料は北海道東部の知床山系西端に近い地域からのもので, 本種 *kusuii* と見なしたが, 原記載とは若干異なる特徴が認められる. しかし大陸産の3種と本邦の既知種とは雄生殖器側片先端部の形状が明瞭に異なり, 北海道固有の種であることには間違いない. 記載文内容と異なると見られるのは, 前胸背板後方に浅い縦溝は認められず, 僅かに圧平される程度で溝状ではない. また後角部先端が角状に裁断された状態 (ÔHIRA, 1994: 287, Fig. 2, C) ではなく, 細く突出状で先端は丸まっていること, 及び上翅端も丸く, 記載の "pointed" の状態ではない. ホロタイプ資料は雄で, 生殖器については後書きで "different shape of aedeagus" とのみ本邦産の既知種との違いを述べているのみで, 説明は無く図示もされていないので今回の種及び大陸産の種との違いは不明である. またこれらの差異点が個体変異の範疇にはいるのかは, 多くの資料を見ていない現状では決定し得ない. 体長体色及び全体の形状から一応本種と見なしておきたい.

*Actenicerus kurilensis* DOLIN, 1987 チシマシモフリコメツキ (写真5)

小清水町北斗, 1♂, 11. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

北海道から四国や九州までの低山地に広く分布し, 大型で上翅の霜降り状毛斑が明瞭なシモフリコメツキを全て *A. orientalis* (CANDÉZE, 1889) と見なしていた時期が長い, 本属の再検討の結果, KISHII (1996: 18-30) は幾つかの種に分割した. 北海道からは本属は4種知られ, 本種以外のものは何れもより小型で本州以西でも広く見られ容易に区別できる. 本種は当初, 旧ソ連の DOLIN が, GURJEVA と KRIVOLUCHKAJA (1968: 45) による国後島からの資料により, *A. pruinus* として記録された標本の検討の結果, 新種として記載したものである. 筆者 (1996: 26-27) は DOLIN 同定の国後島産パラタイプ資料 (1♂, 27. VI. 1971, V. DOLIN leg) (長岡市立

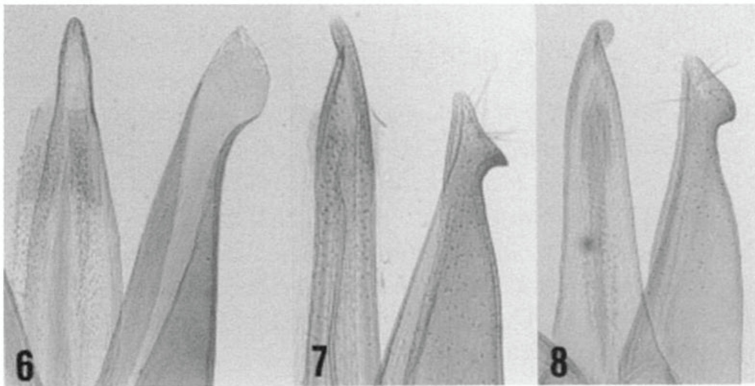


写真 6-8, 雄交尾器先端. 6, ムナグ  
ロツヤコメツキ(8352); 7, エゾミ  
ヤマアカコメツキ(8344); 8, ウス  
スジキバネコメツキ(8348).

科学博物館の山屋茂人氏のご厚意による)の形態と雄生殖器側片先端部の形状とで、北海道東部地区で得られるものはこれと同じものであることを確認した。道東地区のみに分布が限定されると考えていたが、札幌市の資料も最近検したので、北海道全域に分布するものと見られる。

*Ampedus (Ampedus) azurescens azurescens* (CANDÉZE, 1865) アオムネアカコメツキ  
女満別町網走湖畔, 1♂, 5. VII. 1995, 加藤敏行 leg.

本種は小盾板の独特な構造から *scutellaris* セダカアカコメツキの名で、本属のアカコメツキ類の中では最も分かり易い種の一つであったが、太平 (1999: 29-32) の研究により、従来正体不明の状態に取り扱われてきた大型アカコメツキである *azurescens* のシノニムであることが判明したものである。本州産個体群は両性の生殖器構造などに差異点があり別亜種と見なすべきで、Chiuzenji, Niohozan, and Sapporo, Eight examples. の資料で LEWIS (1984: 35) が記載した *scutellaris* が亜種名となった。

*Ampedus (Ampedus) sanguinolentus nippon* KISHII, 1982 クロモンアカコメツキ (写真 9, 16)  
置戸町秋田 (ヨモギの茎), 1♂, 31. V. 2002, 加藤敏行 leg.; 小清水町北斗, 1♂, 1♀, 11. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

上翅に明瞭な黒紋がある著名な種で、此の斑紋は雌では大きく鮮明で、雄では会合線に沿って僅かに暗色な個体が殆どで消失することもあり、上記資料中で置戸町秋田のものでは全く認められなかった。この傾向はヨーロッパ産の原名亜種でも見られ、これとは両性の生殖器構造が明瞭に異なるが、両亜種の分布境界は明らかでない。北海道産の資料で記載され比較的よく採集されているが、本州からも山形・群馬などから僅かに知られている。

*Ampedus (Ampedus) ainu ainu* (LEWIS, 1894) アイヌアカコメツキ (写真 10, 17)  
置戸町中里, 1♂, 7. VIII. 1998, 加藤敏行 leg.; 斜里町朱円 (ヤチダモ), 1♀, 24. IV. 2001, 加藤敏行 leg.; 北見市緑ヶ丘, 2♂♂, 15. V. 2001, 加藤敏行 leg.; 小清水町北斗防風林脇, 1♀, 30. V. 2002, 加藤敏行 leg.; 標津町根北峠側溝, 1♂, 28. VI. 2002, 加藤敏行 leg.; 標津町古多糠忠類川(花上), 1♂, 28. VI. 2002, 加藤敏行 leg.; 標茶町多和平, 1♂, 29. VII. 2002, 加藤敏行 leg.

北海道分布のアカコメツキ類は多くの種が知られるようになり、夏季エゾニュウなどの花上で混在してよく見られるが、一部の種を除き形態や色彩は互いによく似ているので、分類の困難なコメツキの代表格であるが、本種は其中で北海道では最も普遍的に見られる優占種である。両性の生殖器構造では紛れることなく同定可能であるが、外部形態のみでは慎重な比較検鏡が求められる。本州の中部山岳地域には別亜種 (*hondoensis*) が分布する。

*Ampedus (Ampedus) alticola tokoro* KISHII, 1998 エゾミヤマアカコメツキ (写真 7)  
斜里町知床湿原付近, 1♂, 3. XI. 2000, 上手雄貴 leg.

体色などは前種 *ainu* 並びに *A. orientalis* アカコメツキによく似ているが、雄の体形は *ainu* が最も幅が広く楕円状で両側は平行状、*orientalis* と本種 *tokoro* はやや細形で長紡錘状、一般に体毛は *orientalis* が淡黄褐色、他は灰白色。触角第2節は長三角形で第2節より長い、*orientalis* では僅かに長いのみで(1.2倍、他の2種では明らかに長い(1.5倍)。前胸背板は台形に近く基部から前方に弧状に狭まるのが *tokoro* で、*orientalis* では中央から狭まり、*ainu* では中央部が側方に膨らみ背板は半球形に近い。後角基部は *tokoro* と *orientalis* は直線状で狭まらぬが、*ainu* のみは明瞭に弧状に狭まる。前胸背板点刻は *orientalis* が最も疎で小型単純やや不規則、*tokoro* が密でより大きく蛇の目状(高倍率)で規則的、*ainu* は *tokoro* に似るが不規則である。しかしこれらの差異点も小型の個体と大型の個体では異なることもあり、また雌雄でも同じように異なるので両性の生殖器形態の精査が必要である。原名亜種は中部山岳地以北の山地に見られるが少ない。なお和歌山・兵庫の両県からも記録されている。

*Ampedus (Ampedus) optabilis kusuii* ÔHIRA, 1989 エゾオオアカコメツキ

小清水町美和, 1♂, 29. X. 2000, 上手雄貴 leg.; 清里町清泉清里峠, 1♀, 15. VII. 2002, 加藤敏行 leg.

北海道ではアオムネアカコメツキと共に最も大型のアカコメツキで、共に前胸背板が青色光沢を帯びる個体が多く分かり易い種で、これら2種間では小盾板形状が明瞭に異なる。原名亜種は本州から九州までの山地に広く分布し、*orientalis* アカコメツキに次いで普通に見られ、四国山地の個体は別亜種(*awa*)である。

*Ampedus (Ampedus) orientalis* (LEWIS, 1894) アカコメツキ(写真18)

斜里町知床湿原付近, 1♂, 3. XI. 2000, 上手雄貴 leg.

本邦で最も普通に見られ、山地に多いが低山地にも生息する。北海道産の個体群は本州以南に分布するものとは、触角第4-10節の形状が幅広く顕著な釣り鐘型で、普通の鋸歯状である後者とは異なり、また小盾板もより幅が広い。両性の生殖器形態にも有意と思われる差があるので別亜種と見るのが妥当であろう。

*Ampedus (Ampedus) yagishiriensis* ÔHIRA, 1986 ヤギシリアカコメツキ(写真12, 19)

小清水町美和, 1♀, 29. X. 2000, 上手雄貴 leg.

焼尻島からの資料で記載されたが、その後奥尻島と北海道本土での分布も明らかになっている。雌貯精囊内の刺状突起は極めて細く90-100本位あり、先端の突起より基根部が長い。大きさ、体形、色彩などが *A. matobai* マトバアカコメツキによく似ていて外部構造での区別は極めて困難であるが、後者は雌貯精囊内の刺状突起はより太長く40-45本位である。

*Ampedus (Ampedus) takaoensis* ÔHIRA, 1973 タカオアカコメツキ(写真13, 20)

小清水町美和, 1♀, 12. VI. 2000, 川原進 leg.

種名のように東京都の高尾山からの資料で記載されたもので、これまでに栃木・新潟・富山・福井などの資料を検しているが北海道からは初めてで、当初別種と思われたが、雌貯精囊内の刺状突起の形状と数は本州産のものと完全に一致し、外部形態も殆ど差異を認められなかった。

*Ampedus (Ampedus) kibane* KISHII, 1994 エゾキバネコメツキ(写真14, 21)

小清水町美和, 1♀, 29. X. 2000, 上手雄貴 leg.; 訓子府町豊坂(小野宅前), 1♀, 6. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

北見市置戸町の1雄資料で記載され、その特異な上翅色彩と生殖器側片形状で、未記載の種であることは極めて明瞭であった(採集データの年号が1983と表記されたが1993が正しい)。その後、長岡市立科学博物館の山屋茂人さんから同定依頼された資料にも、上記の正模式標本と同時に採集された2頭の標本が見出された(岸井, 1996: 3)。更にその後も同じ置戸町産の雄資料1頭(10. V. 1995, T. KATO leg.)を検したので、これまでに計4頭の雄資料に接し得たが、依然として雌個体は未知であった。今回初めて上記のように2頭の雌を検し得たが外部形態は雄と殆ど

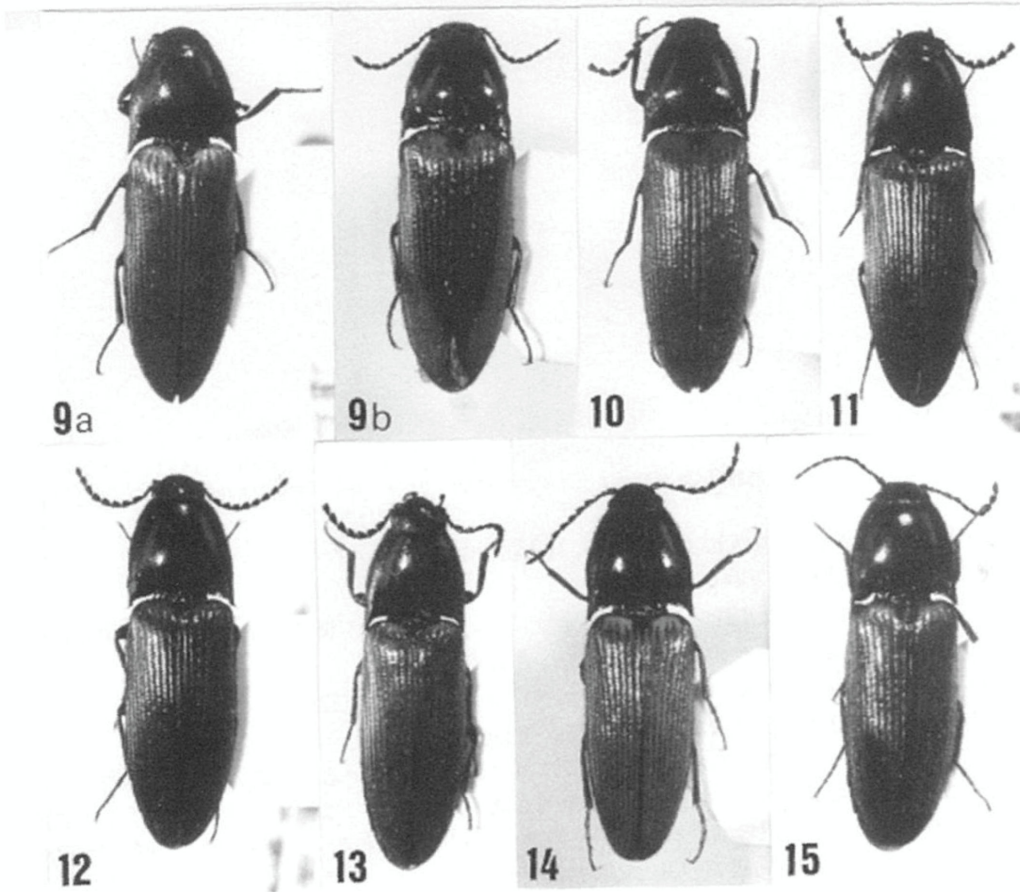


写真9-15. 9, クロモンアコモメツキ(a, ♂, 10.6 mm; b, ♀, 9.4 mm); 10, アイヌアコモメツキ(♂, 10.4 mm); 11, エゾミヤマアコモメツキ(♂, 10.4 mm); 12, ヤギシリアアコモメツキ(♀, 10.9 mm); 13, タカオアコモメツキ(♀, 10.8 mm); 14, エゾキバネコメツキ(♀, 10.1 mm); 15, ウススジキバネコメツキ(♂, 10.1 mm).

同じで、貯精囊内の刺状突起は形状が *yagishiriensis* とよく似ているが50-60本で、後者の90-100本より明らかに少ない。更に外形も似ているが前胸背板と小盾板の点刻はより密で、上翅色彩が著しく異なり、特にその基部の色彩が明るい黄色斑となり、*yagishiriensis* では淡色になるが狭く赤黄色である。現在北海道東部からのみ知られる。

*Ampedus (Ampedus) takeuchii* KISHII, 1955 ウススジキバネコメツキ (写真8, 15)

丸瀬布町本流, 1♂, 25. VII.1998, 加藤敏行 leg.

上翅は黄褐色で黄色味が強いいわゆるアコモメツキ類としては異質で、側縁と中央近くの間室に褐色縦条があるので分かり易い種であるが、此の縦条は消失するものもある。雄交尾器側片先端の形状は先端と側方突起共に丸まっており独特である。雌貯精囊内の刺状突起は小型で短い。角質化の度合いは充分で基部構造は大きくよく発達し、明瞭なものほぼ100本前後と微小な10本余りの刺状構造も認められる。北海道と樺太に分布する。ヨーロッパからシベリア西部に分布する *A. tristis* とはよく似るが、触角節・前胸背板点刻・雄生殖器側片先端の形状などに明瞭な差異点があり、上翅色彩と黒褐色斑も異なり別種と見なされる。しかし両種の同質性又は近縁性は極めて高い。

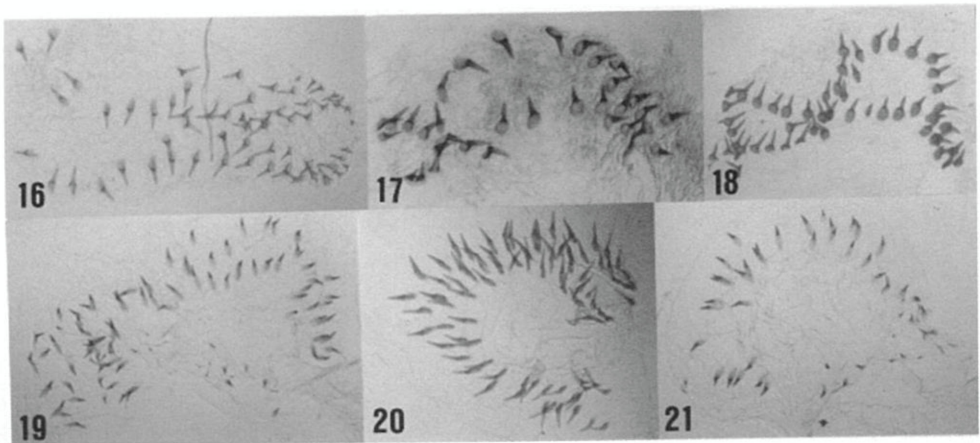


写真 16-21, 雌貯精嚢内刺状突起. 16, クロモンアコモメツキ(8336); 17, アイヌアコモメツキ(8346); 18, アコモメツキ(7085); 19, ヤギシリアコモメツキ(8338); 20, タカオアコモメツキ(8342); 21, エゾキバネコモメツキ(8341).

*Ampedus (Ampedus) hypogastricus* (CANDÉZE, 1873), subsp. エゾアカハラクロコモメツキ  
小清水町美和, 1♀, 29. X. 2000, 上手雄貴 leg.

前回の報告(岸井, 2002: 13)でも述べたように, 北海道産の本種は本州以南に分布する個体群とは異なる特徴が認められ, 別亜種と見なすべきものである。

*Ectinus puberulus* (MIRWA, 1928) キンケオオカバイロコモメツキ(写真 22)

斜里町眞鯉(金山橋, 2♀♀, 24. VI. 2000, 加藤敏行 leg.

札幌市を原産地として記載され, この周辺では屢々記録されているが, 北海道の他の地域からの報告例は極めて少ない. 今回の斜里町からの例も此の周辺地区では初めてである. 多くの個体が得られる種ではなく, 本州では青森から多くの個体が得られた報告(大平・尾崎, 1998: 25-28)と, 筆者が山梨県の鳳凰山周辺での20頭以上の資料を検した以外では, 東北地方から和歌山までのほぼ10府県からの1-2頭の報告例があるにすぎない. また本州産の個体の中には上翅が赤褐色を帯びる個体や, 黄褐色の明瞭な縦条を第3-7間室にもつ個体もある. 四国及び九州からの資料も検しているが, 両性の生殖器構造で異なる特徴が認められ別亜種の可能性が極めて強いので, 本州以西の資料は更に詳しく検討する必要がある。

*Ectinus dahuricus persimilis* (LEWIS, 1894) オオカバイロコモメツキ

置戸町中里, 1♀, 7. VIII. 1998, 加藤敏行 leg.; 斜里町海別岳自然休養林, 1♂, 29. VI. 2000, 川原進 leg.; 標津町根北峠側溝, 1♂, 28. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

中国東北地域, 朝鮮半島及びロシア沿海州に分布する原名亜種と北海道産個体群との形態比較については, 大平・保田(1997: 19-24)に詳しく, 北海道産個体群は別亜種 *persimilis* と認められるとしている. これはLEWIS(1894: 312)が蕁菜沼周辺で採集した1頭の資料で記載したもので, 本州からの記録はなく, また大平・保田も本州産個体群については触れていない. 本州では北陸・東海・中部の山岳地帯から以北に分布し, 両性の生殖器構造には多少の相異点もあるので詳細な検討が必要であろう。

*Ectinus sericeus sericeus* (CANDÉZE, 1878) カバイロコモメツキ

小清水町美和, 2♂♂, 12. VI. 2000, 川原進 leg.; 斜里町海別岳自然休養林, 1♂, 29. VI. 2000, 川原進 leg.; 小清水町浜小清水防風林, 1♀, 26. VII. 2002, 加藤敏行 leg.; 小清水町大栄, 1♀, 13. VIII. 2002, 加藤敏行 leg.

広い地域に分布し個体数も多い種で, 北海道から九州までの全府県と多くの付属島嶼からも記録がある. 国外では樺太・ロシア沿海州・朝鮮半島などからの報告例もあり, GURJEVA(1979:



361) による樺太・ロシア沿海州の記録は確実と思われるが、朝鮮半島からの記録はKon-Kuk Univ. Press (1994: 160) に見られ、データの詳細は不明である。筆者は済州島漢拏山 (Mt. Hallasan) から得られた、本種に外形色彩共に極めてよく似た種を検したが (KISHII et PAIK, 2002: 14-15), これは全く別の未記載種 *E. tamnaensis* で、雄生殖器は邦産の *E. sepes* キアシムナボソコメツキと紛らわしい程よく似ているが、互いに触角2-4節の相対的長さが著しく異なる。この種が半島本土にも分布するか否かは不明であるが、本種の朝鮮分布は疑わしいものと思う。対馬には本種の別亜種 (*babai*) の分布が知られているが、これは対馬固有の別種の可能性もあり、*tamnaensis* とは矢張り触角2-4節の相対的長さや雄生殖器形状が異なる。なお、南西日本に分布する本種の上翅は黒化するものが多く、九州辺りでは得られた全個体がそうであることが殆どのである。

*Sericus brunneus sachalinensis* (MIWA, 1928) チャイロヒメコメツキ (写真 23)

小清水町藻琴山登山道, 1♀, 19. VII. 1995, 川原進 leg.

本邦産の *S. brunneus* チャイロヒメコメツキについての分類学的考証としては、鈴木 (1987: 6-7) の報告が詳しく、樺太原産のMIWA 記載の種 (1928: 40-41) と北海道産のものは同じもので、ユーラシア大陸北部域に広く分布する種の亜種と見なされると言うことが、現在一般的な取り扱いである。筆者は樺太産の個体を検していないが、少なくとも沿海州分布個体と北海道産個体との間に、雄生殖器構造などで有意の差が認められ、北海道産個体群を別亜種とすることに異論はない。また鈴木 (1987: 6-7) は本邦産のものについて、それぞれの模式標本を検討の上変異の範疇にはいるとして、同一亜種としている。しかし筆者の検した本州産資料は北海道のもの及び原名亜種とも異なるので、筆者が本誌 (2000: 12) でも述べたように、本州産個体群は別亜種とすべきもので、MIWA (1928: 41) が燕岳から記載した *montanus* を復活させて亜種名とすべきであろう。またその際、朝鮮半島水原産の資料についても触れたが、これは故中根猛彦先生が所持していたもので、1955年頃筆者の研究用に渡されていた資料 (1♂, Suigen, Corea, 5. V. 1931, Kaku SATO leg.) であるが、この標本は邦産の *S. fugisanus* クロヒメコメツキに極めてよく似ており、本種チャイロヒメコメツキとは明らかに別種で、未記載種の可能性が強く、北東アジアの *Sericus* 属は再検討が必要と思う。

*Silesis musculus musculus* CANDÉZE, 1873 クチプトコメツキ  
標茶町多和平, 1♂, 29. VII. 2002, 加藤敏行 leg.

本属は中国南部からインド亜大陸を含め、東南アジアで多くの種に分化したコメツキで、最近になって調査研究が進み、PLATIA と SCHIMMEL (1991, 1996, 2000) により多くの種が記載された。本邦では南西諸島を除く本土では、本種のみが広く高地から低地まで普遍的に分布する。他に *S. scabripennis* なる種が LEWIS (1894: 315) により熊本の湯山から一頭の資料で記載されて

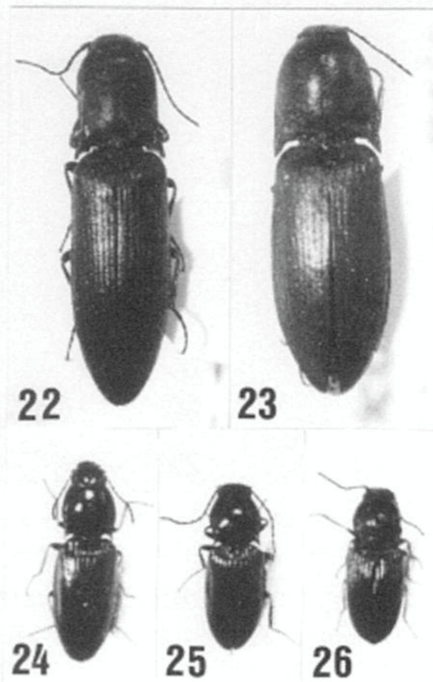


写真 22-26. 22, キンケオオカバイロコメツキ(♂, 12.6 mm); 23, チャイロヒメコメツキ(♀, 9.5 mm); 24, ウスチャミズギワコメツキ(♂, 4.4 mm); 25, ピリカツヤミズギワコメツキ(♂, 3.7 mm); 26, ヨツモンミズギワコメツキ(無紋型)(♀, 3.4 mm).

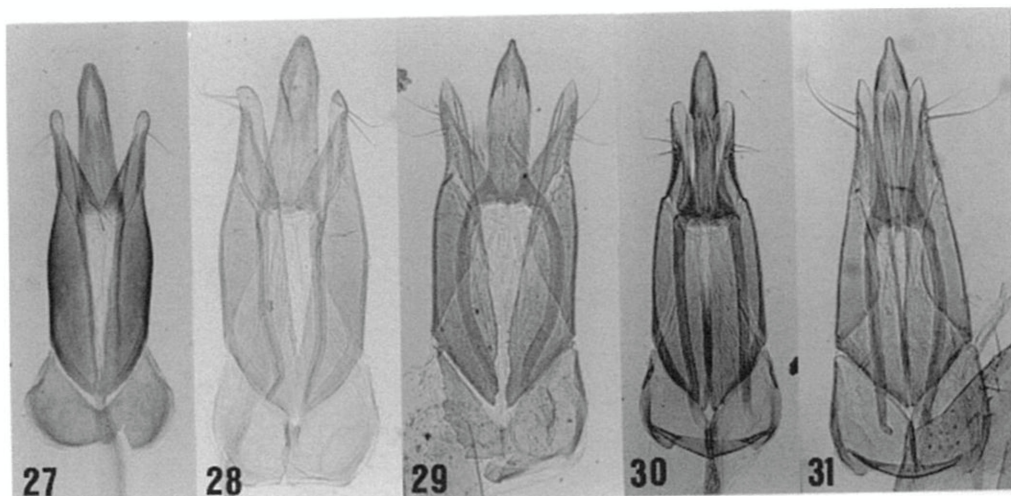


写真 27-31, 雄交尾器. 27, ウスチャミズギワコメツキ(2963); 28, ビリカツヤミズギワコメツキ(8356); 29, ヨツモンミズギワコメツキ(8357); 30, エゾキアシミズギワコメツキ(8358); 31, イシダミズギワコメツキ(8359).

いるが, この種の実体については研究者により判断が異なる. 九州からは未記載と見られる *Glyphonyx* 属の種があり, 複数の個体が得られていて, これが *scabripennis* であろうと見る研究者もいるが, 筆者はこの両属の頭部構造の明瞭な違いを LEWIS が見違えらると思えず決定しかねている. 本種 *musculus* は別に八丈島と対馬から別亜種 (*nomurai*, *tsushimensis*) が報告され, 最近済州島からも別亜種 (*quelpartianus*) が記載された. 朝鮮半島本土からも Kon-Kuk Univ. Press (1994: 160) の記録があるが, これは北朝鮮とロシア沿海州などに分布する *S. improvisus* GURJEVA, 1976 とと思われる.

*Melanotus castanipes matsumurai* SCHENKLING, 1927 ハネナガクシコメツキ

小清水町北斗, 1♀, 11. VI. 2002, 加藤敏行 leg.

本種はユーラシア大陸のほぼ全域と北米の一部に分布し, 周辺地域を含めた邦産の個体群はこれとは形態的な差異点は少なく, 雄交尾器側片先端形状が原産地のヨーロッパ産のものとは異なるので, 現在その亜種と見なしているが, 最近発表された PLATIA と SCHIMMEL (2001) の大著の内容から, この様な差異も独立の別種とすることも考えられる. 何れにしろその場合 MATSUMURA (1911: 121) が樺太産の資料で命名した *M. carinatus* が有効名となるが, この名称は先取されており SCHENKLING (1927: 277) による置換名 *matsumurai* が用いられる. なお近似の *M. villosus* は本種同様ユーラシア大陸のほぼ全域に分布するが本邦には見られない. 現在本亜種の分布地として樺太・日本本土の高地帯・済州島・朝鮮半島北部・中国雲南, 湖北省の資料を確認しているが, 原名亜種との分布境界は不明である.

*Menoko difficilis* (LEWIS, 1894) ウスチャミズギワコメツキ (写真 24, 27)

訓子府町大谷ポンオロムシ林道, 2♂♂, 1♀, 15. VII. 1998, 加藤敏行 leg.; 斜里町眞鯉(金山橋), 1♀, 24. VI. 2000, 加藤敏行 leg.; 小清水町美和(ヤナギ), 7♀♀, 26. VII. 2002, 加藤敏行 leg.; 標茶町多和, 3♀♀, 29. VII. 2002, 加藤敏行 leg.

北海道固有種で LEWIS (1894: 187) が函館からの資料で記載し, 道内では各地で見られるが, 大平・保田 (1995: 2-3) も述べているように, 地域による色彩等の変異の多い種である. 今回の道東部からのものが果たして札幌や道南の個体群と同じものなのか疑問もある. 所属する属名は *Cryptohypnus*, *Menoko*, *Oedostethus*, *Oedostethus (Menoko)* のように変遷が見られる. 筆者は本属特有の爪基部にある膨大した膜状構造は他の甲虫群の一部でもそうであるが, やはり重要

な形態的特徴と見るべきと思うし、生態的にも植物上でスイーピングで採集されることも多いので、独立の属 *Menoko* として扱いたい。雄交尾器側片は細く先端拡張部の形状は小さいが、*Oedostethus* 属では太短く顕著に広がり、この傾向は中片でも同様である。

*Menoko pirika* KISHII, 1994 ピリカツヤミズギワコメツキ (写真 25, 28)

置戸町秋田 (ヨモギ), 15♂♂, 1♀, 16. VI. 1995, 加藤敏行 leg.; 訓子府町大谷ボンオロムシ林道, 3♂♂, 15. VII. 1998, 加藤敏行 leg.; 斜里町真鯉 (金山橋), 1♂, 24. VI. 2000, 加藤敏行 leg.

本種も北海道固有の種で、層雲峡及び北見市などの資料で記載され、前種に似るが体は濃黒褐色又は黒く、前胸背板点刻はより大きく密、上翅条線は細いが完全で、不明瞭又は消失することは一般にはない。雄交尾器の側片及び中片共に前種より太い。

*Fleutiauxellus (Neomigiwa) quadrillum* (CANDÉZE, 1873) ヨツモンミズギワコメツキ (写真 26, 29)  
女満別町網走湖畔, 1♂, 4♀♀, 5. VII. 1995, 加藤敏行 leg.; 標茶町磯分内 (釧路川), 1♂, 14. VIII. 2002, 加藤敏行 leg.

上翅に2~4個の黄色斑をもつ本属の種は本邦から10種程知られているが、その中で本種が最も広く普遍的に分布する種で、水際や芝地で多くの個体を見ることがある。上翅の4黄色斑の大きさは屢々変化するが、完全に消失することはないのが一般である。しかし今回の資料中で女満別町網走湖畔からの雌雄各1頭の標本では完全に消失し、一見別種のように本州産の *F.(N.) nikkoensis* ニッコウミズギワコメツキによく似た個体であったが、交尾器の形態は本種と同じであった。本種は KIM & PARK (1991: 193; 1992: 223) により韓国の明智山と大清湖からも記録され、韓 (2000: 29-32) はよく似た種類である *F.(Migiwa) yotsuboshi* ヨツボシミズギワコメツキのほぼ300頭を記録したが、本種は検し得なかったと述べ、更に KIM, HAN & LEE (2000: 272) は KIM & PARK (1991, 1992) の標本は紛失していると述べているので、現在朝鮮半島における本種の分布は明確ではない。筆者は中国吉林省産の本種と見られる資料を所持 (2exs., 中国吉林省長白山二道白河, 28. VI. 1987, J.-K. LI leg.) しており、前胸背板の形状と表面構造から本種に間違いないと見られるが、全体に小型で軟弱な細い体形は、本邦産の個体とは異なる点もあり更に調査したい。なお本種とヨツボシミズギワコメツキでは雄生殖器側片の長さの中片先端の形状が明瞭に異なる。

*Fleutiauxellus (Migiwa) curatus septentrionalis* (KISHII, 1976) エゾキアシミズギワコメツキ (写真 30)  
北見市北上 (常呂川), 1♀, 3. VII. 1997, 加藤敏行 leg.; 標津町古多糠忠類川河畔, 3♂♂, 1♀, 18. VII. 2002, 加藤敏行 leg.; 標茶町多和平, 1♀, 29. VII. 2002, 加藤敏行 leg.

本種は LEWIS の鹿兒島・長崎・兵庫 (1869-1871) での蒐集による資料のようで、これに基づき本種を CANDÉZE (1873: 12) が記載したものである。この本土産の原名亜種に比して、北海道産個体群では体毛は白く、触角は雄でも前胸背後角よりやや短く、その第2節は幅より僅かに広い。本属では最も広く普遍的に分布する種で、沖縄本島 (*okinawanus*)、濟州島・朝鮮半島 (*coreaensis*) からは別亜種も知られている。又奄美大島・徳之島から別亜種 (*kishiii*) として記載された個体群は現在独立の別種とされることもある。なお筆者は中国東北産の個体も見ているが、朝鮮半島のもの (*coreaensis*) と同じと見られる (中国吉林省左家革甸, 1♂, 13. VI. 1989, J.-K. LI leg.).

*Fleutiauxellus (Migiwa) ishidai* KISHII, 1976) イシダミズギワコメツキ (写真 31)

北見市北上 (常呂川), 2♀♀, 3. VII. 1997, 加藤敏行 leg.; 標津町古多糠忠類川河畔, 1♂, 3♀♀, 18. VII. 2002, 加藤敏行 leg.

本種は北海道固有種で道内の分布域は広い。邦産本属の中では最も小型の種である。なお原記載時の雄交尾器図は中片先端が欠如していたので完全なものを図示する。

- Dicronychus nothus* (CANDÉZE, 1865) オオハナコメツキ  
愛別町愛山石狩川河川敷, 1♀, 14. VI. 2002, 加藤敏行 leg.
- Cardiophorus pinguis* LEWIS, 1894 クロハナコメツキ  
斜里町真鯉(金山橋), 1 ex., 24. VI. 2000, 加藤敏行 leg.

<引用文献>

- CANDÉZE, E.(1873) Elaterides. Insectes recuillis ou Japon par M.G. LEWIS. *Mem. Soc. Roy. Sci., Liege*, 2, 5: 1-32.
- DOLIN, V. G.(1987) Novije vidi zhukov-shchelkunov(Coleoptera, Elateridae) s Dal' nego Vostoka. *Ent. obozr., Leningrad*, 66, 2: 345-350.
- GURJEVA, E. L.(1989) Coleoptera, Click-beetles (Elateridae), Subfamily Athoinae, Tribe Ctenicerini, *Fauna of USSR, NAUKA, Leningrad*, 12, 3: 1-293.
- GURJEVA, E. L. & KRIVOLUCHKAJA, G. O.(1968) Fauna zhukov-shchelkunov (Coleoptera, Elateridae) Kurilskix ostrovov. In: *Fauna i ekologija nasekomix Dalnego Vostoka. Sb. materialov BPI DVNC SO AN SSSR, Vladivostok*: 42-49.
- 韓泰萬(HAN T.-M.) (2000) Taxonomy of the Negastrinae (Coleoptera: Elateridae) in Korea. 誠信女子大学大学院, 硕士学位論文: 1-42.
- 金源澤(1984) Insect Fauna of Four Craters in Cheju Island. 済州大学校論文集, 18: 197-211.
- KIM, J.-I., T.-M. HAN & S.-H. LEE (2000) Taxonomic Study of the Genus *Floutiauxellus* MEQUIGNON (Coleoptera, Elateridae, Negastrinae) in Korea. *Ins. Koreana*, 17(4): 265-275.
- KIM, J.-I. & H.-C. PARK(1991) The Survey on the entomofauna at the Mt. Myungji under the resting-year Scheme: the first year report. 武甲山・明智山自然生態系調査研究報告書. 京畿道: 167-208.
- KIM, J.-I. & H.-C. PARK(1992) A Faunistic study of Terrestrial Insects in the Daechung lake. 大清湖沼 生態系調査研究報告書. 忠清南道: 215-236.
- KISHII, T.(1976) New Negastrinae with Some Notes. Some New Forms of Elateridae in Japan(X). *Bull. Heian High Sch., Kyoto*, 20: 17-45.
- KISHII, T.(1993) Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area (12). *ibid.*, 37: 1-19.
- KISHII, T.(1994) Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area (13). *ibid.*, 38: 1-35.
- KISHII, T. T.(1996) Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area (14). *ibid.*, 39: 1-40.
- 岸井 尚(1996) 山屋茂人氏蒐集の珍しいコメツキムシ. *NEJIREBANE*, 74: 1-4.
- 岸井 尚(2000) 永幡嘉之氏蒐集のロシア沿海州北部のコメツキムシについて. *ibid.*, 90: 5-12.
- KISHII, T. T.(2001) Revision of the Genus *Scutellathous* from Japan, with Descriptions of Two New Species and Taxonomic Notes on its Relatives (Elateridae, Coleoptera). "Some New Forms of Elateridae in Japan (XXXI)". *SUKUNA-HIKONA, Spec. Pub. Japan Col. Soc.*, 1: 220-214.
- 岸井 尚(2002) 加藤敏行氏蒐集の北海道東部地域のコメツキムシについて. *NEJIREBANE*, 99: 10-15.
- KISHII, T. T. (2002) Two New Species of the Genus *Limoniciscus* REITTER, 1905 (Coleoptera: Elateridae) from Hokkaido, Japan. *Ent. Rev. Japan*, 57(2): 129-138.
- KISHII, T. T. et PAIK, J.-C. (2002) Elaterid-beetles of Is.Cheju (Quelpart Island)(Coleoptera: Elateridae). *ibid.*, 57(1): 1-27.
- Kon-Kuk University Press (1994) Check List of Insects from Korea. The Entomological Society of Korea & Korean Society of Applied Entomology: 133-701.
- 李英仁・金源澤・金大浩(1985) 漢拏山天然保護区域学術調査報告書. 済州大学校農村振興廳, 済州道: 351-455.
- LEWIS, G.(1894) On the Elateridae of Japan. *Annl. Mag. Nat. Hist.*, [6]13: 182-201, 255-266, 311-320.
- MIWA, Y.(1928) New and some rare species of Elateridae from the Japanese Empire. *Ins. Matsum., Sapporo*, 3: 36-51.
- MIWA, Y.(1934) The fauna of Elateridae in the Japanese Empire. *Dep. Agr., Govemm. Res. Inst., Formosa*, 65: 1-289.
- 大平仁夫(1992) 北海道とその周辺のコメツキムシ (VII). *jezoensis*, 19: 79-89.
- OHIRA, H.(1994) New or little-known Elateridae (Coleoptera) from Japan, XXIX. *Trans. Shikoku Ent. Soc.*, 20 (3-4): 285-287.
- 大平仁夫(1995) 北海道とその周辺のコメツキムシ (XII). *jezoensis*, 22: 75-81.
- 大平仁夫(1996) 北海道とその周辺のコメツキムシ (XIII). *ibid.*, 23: 67-71.
- 大平仁夫(1999) 日本産 *Ampedus* 属のコメツキムシについて (2), *Ampedus (Ampedus) azurescens*. *New Entomol.*, 48(3,4): 29-32.
- 大平仁夫・尾崎俊寛(1998) キンケカバイロコメツキの分布・生態について. *Celastrina*, 33: 25-28.
- 大平仁夫・保田信紀(1995) 北海道産 *Oedostethus* 属のコメツキムシ類について. 層雲峡博物館報告, 第15号: 1-12.
- 大平仁夫・保田信紀(1997) 層雲峡とその周辺のコメツキムシ (7). *ibid.*, 第17号: 19-24.

- 大平仁夫・保田信紀(1999) 北海道に産するコメツキムシ類目録, *ibid.*, 第19号: 1-25.
- PLATIA, G. et R. SCHIMMEL (1991) Il genere *Silesis* CANDÉZE nella regione indiana e cinese (Coleoptera, Elateridae, Adrastini). *Fragm. Entomol., Roma*, 23(1): 101-177.
- PLATIA, G. et R. SCHIMMEL(1996) Nuove species e nuovi dati di *Silesis* CANDÉZE della regione indiana e cinese (Coleoptera, Elateridae). *ibid.*, 28(2): 245-255.
- PLATIA, G. et R. SCHIMMEL(2000) New *Silesis* of the *hilaris* group from south India and Srilanka with key to the known species. (Coleoptera, Elateridae, Synaptini). *Lambillionea*, C, 2: 319-326.
- PLATIA, G. et R. SCHIMMEL(2001) Revisione delle specie orientali (Giappone e Taiwan esclusi) del genere *Melanotus* ESCHSCHOLTZ, 1829 (Coleoptera, Elateridae, Melanotinae). Monogr. XXVII, *Mus. Reg. Sci. Nat. Torino*: 1-638.
- STIBICK, J. N. L. (1978) A revision of the Hyonoidinae of the world, Part II (Col. Elateridae). *EOS, Rev. Espanola Ent.*, LII: 309-386.
- 鈴木 互(1987) 日本地域におけるコメツキムシ科の分類学的覚書(II). 甲虫ニュース, 77: 1-7.
- TARNAWSKI, D.(1996) A world catalogue of Ctenicerini FLEUTIAUX, 1936 (Coleoptera: Elateridae: Athoinae). Genus, *Wrocaw*, 7(4): 587-663

## 箕面市小野原のゴミムシ類—タナカツヤハネゴミムシの豊産—

森 正人

〒651-1432 西宮市すみれ台2丁目2-5

箕面市は大阪府北部に位置し、古くから紅葉の景勝地や国内有数の昆虫産地として有名な「箕面山」では多くの専門学者、アマチュアによる調査事例や研究報告が極めて多い地域である。一方で箕面市南部の平地は、近隣の豊中市や池田市、茨木市に続く市街地が広がり、主に住宅地としての利用が進んでいる。竹林や社寺林、溜池、耕作地などの自然環境は少ないながら所々に残されているが、このような場所での調査や採集記録はほとんど見られない。

筆者は里山的な環境が比較的まとまった規模で残された箕面市南部の小野原地域において昆虫類の調査の機会に恵まれ、そのうちゴミムシ類については興味深い内容が含まれているので報告しておくたい。

今回報告する採集場所は、箕面市小野原にある仁鳥大池付近の小規模な水田跡地である。この場所は水田1枚分程度の広さで周囲を竹林に囲まれ、地面は比較的湿って落ち葉が薄く堆積している。また、比較的最近侵入したと思われるナンキンハゼが数本生育し、常に薄暗い環境である。採集は2001年6月15日、7月3日、10月15日の計3回行い、以下の15種のゴミムシ類の生息を確認した。

1. ヒメヒョウタンゴミムシ *Clivina niponensis* BATES 18 exs.
2. ウソオビコミズギワゴミムシ *Paratachys sericans* (BATES) 33 exs.
3. クリイロコミズギワゴミムシ *Tachyura fumicata* (MOTSCHULSKY) 17 exs.
4. キイロセマルコミズギワゴミムシ *Elaphropus latissimus* (MOTSCHULSKY) 9 exs.
5. アシミゾナガゴミムシ *Pterostichus sulcitaris* MORAWITZ 8 exs
6. トックリナガゴミムシ *Pterostichus haptoderoides japonensis* LUTSHNIK 4 exs.
7. コガシラナガゴミムシ *Pterostichus microcephalus* (MOTSCHULSKY) 2 exs.
8. オグラヒラタゴミムシ *Agonum ogurae* (BATES) 19 exs.
9. タナカツヤハネゴミムシ *Harpalomimetes orbicollis* N. ITO 72 exs. (写真)
10. クビナガゴモムシ *Oxycentrus argutoroides* (BATES) 3 exs.

- 11.チビゴモクムシの一種 *Acupalpus* sp. 68 exs. (写真)  
 12.ムネミゾチビゴモクムシ *Anthracus horni* (ANDREWES) 3 exs. (写真)  
 13.ミドリマメゴモクムシ *Stenolophus difficilis* (HOPE) 1 ex.  
 14.オオクビボソゴミムシ *Brachinus scotomedes* REDTENBACHER 1 ex.

この地で確認されたゴミムシ類は種数としては多いものではないが、やや注目すべき数種を含んでいる。最も個体数が多かったのはタナカツヤハネゴミムシで、落ち葉の下や草の根際、土の割れ



写真 左：タナカツヤハネゴミムシ  
 右上：チビゴモクムシの一種  
 右下：ムネミゾチビゴモクムシ

目の中などあらゆる場所で優占して出現した。本種は本州、四国、九州に広く分布するが、いずれの地域においても記録は少なく、また産地における個体数は少ない種であり、当該地のような産出状況は稀と考えられる。次に、ムネミゾチビゴモクムシについても同様に広域に分布しているが産地はさらに少なく、近畿地方での記録はほとんど見られない。チビゴモクムシの一種は、通常このような環境に多く生息するキイロチビゴモクムシ *Acupalpus inornatus* BATESではなく、ホソチビゴモクムシ *Acupalpus sobosanus* HABU に近い種であるが、形態的に若干異なることから伊藤 昇氏により現在検討中である。

当該地では3回にわたって各々2時間程度の綿密な採集を行ったが、一般的に湿った地面に多く生息するミズギワゴミムシ属、アオゴミムシ属の種は一度も確認されなかった。また、耕作地に多いゴモクムシ属、ゴミムシ属についても同様に全く出現していない等、やや偏った種構成が注目される。なお、当該地は宅地造成のため現在では環境そのものが消滅した。今回の結果がこの地域の昔の面影を残すものかどうかは不明であるが、今後はこのような市街地に囲まれた場所にも注意する必要があると考えられる。最後に、一部の種についてご教授頂いた伊藤昇氏に感謝の意を表する。

## 虫屋の広場(39)

### 地域別総合甲虫目録[XV]

#### ◎ 複数市町村を包含するやや広い地域の目録

##### 01. 広島県呉市とその周辺

岡本 巖 (2000) : 呉市とその周辺の甲虫目 (1), 広島虫の会会報, (39) : 1-13 [323種]

##### 02. 兵庫県多可郡

・高橋寿郎(兵庫昆虫同好会事務局) (2001), 多可郡の甲虫相, きべりはむし, 29 (1) : 10-27.

[60科, 484種].

##### 03. 兵庫県淡路島

・高橋寿郎 (1998-2000), 淡路島産甲虫目録 (1-3), PARNASSIUS, (47) : 1-10. [17科, 145

種], (48): 1-16. [44科, 235種]. (49): 1-16. [15科, 275種] (総計) [76科, 655種].

04. 千葉県高宕山・鹿野山

・ 山崎秀雄 (1994), 県立高宕山自然公園と鹿野山の鞘翅目昆虫類, 「自然公園自然環境調査報告書—県立養老溪谷奥清澄自然公園・県立高宕山自然公園・県立嶺岡山系自然公園」(千葉県環境部自然保護課), 117-139. [66科, 699種] (水野弘造)

## コーヒ・ブレイク(話のたね)

### 中国東北人の食虫俗

李景科 (Li Jing-Ke)

P.O.Box 019, Dandong, Liaoning, China (Far East Insects)

中国東北部での食虫人口はまだ多く, 著者は1979年以来調査を継続しているが, 食用される昆虫は次のとおりである.

種類	虫態	食用調理法
Mantodea: <i>Tenodera sinensis</i>	成虫・卵	焼く
<i>Mantis religiosa</i>	成虫・卵	焼く
Orthoptera: Acrididae(中-大形, 各種)	成虫	焼く
<i>Oxya chinensis</i>	成虫 <sup>*1</sup>	油炸
Homoptera: <i>Magicicada septendecim</i>	半蛹・成虫	油炸
Lepidoptera: Eucleidae(各種)	越冬幼虫	生食あるいは焼く
Saturniidae; <i>Philosamia cynthia</i>	蛹	油炸
<i>Antheraea</i> spp. <sup>*2</sup>	幼虫・蛹・成虫	油炸あるいは焼く
Sphingidae; <i>Clanis bilineata</i>	幼虫	焼く
Coleoptera: Dytiscidae; <i>Cybister</i> sp.	成虫 <sup>*3</sup>	油炸
Cerambycidae; <i>Prionus insularis</i>	成虫	焼く
<i>Dorysthenes</i> sp.	成虫	焼く

\*1). この種は毎年韓国へ30~50 t 輸出された.

\*2). *Antheraea pernyi* は吉林, 遼寧において周年にわたり, 家庭用・料理店用の食材に供される. 成虫♂は焼酎に入れ, 「雄蚕蛾酒」の名で日本にも輸出されている.

\*3). 著者も2000年に北朝鮮から1000 kg を輸入した.

## 会 報

発行：2003.4.30. 日本甲虫学会（会長 佐々治寛之）  
（本部）〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付  
振替口座: 00990-8-39672 URL: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>  
Tel: 06-6697-6221 Fax: 06-6697-6225 E-mail: [shiyake@mus-nh.city.osaka.jp](mailto:shiyake@mus-nh.city.osaka.jp)

ねじればね原稿送付先（和文，E-mailでの投稿を歓迎します）

伊藤建夫 〒614-8371 八幡市男山雄徳 8 E7-303 Tel.(Fax) 075-983-3491  
E-mail: [itokyoto@gb3.so-net.ne.jp](mailto:itokyoto@gb3.so-net.ne.jp)

保科英人 〒910-0017 福井市文京3-9-1 福井大学教育地域科学部地域環境講座  
Tel: 0776-27-8692 E-mail: [hhoshina@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp](mailto:hhoshina@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp)

水野弘造 〒611-0002 宇治市木幡熊小路 19-35 Tel.(Fax) 0774-32-4929  
E-mail: [kzmizuno@oak.ocn.ne.jp](mailto:kzmizuno@oak.ocn.ne.jp)

入会及び会費問合せ先（年会費 5,000 円，入会金は不要）

野村英世 〒590-0144 堺市赤坂台 1-18-5 Tel. 0722-98-4066

昆虫学評論原稿送付先（英文）（昆虫学評論参照）

安藤清志，芦田 久，林 靖彦